

抗TNF α 抗体製剤の登場により、炎症性腸疾患(inflammatory bowel disease ; IBD)の治療目標が“症状改善”から“粘膜治癒”へと変わりつつある。しかし、“粘膜治癒”の定義自体が、依然として不明確なままであり、潰瘍性大腸炎(ulcerative colitis ; UC)の内視鏡的重症度評価やCrohn病(Crohn's disease ; CD)における小腸内視鏡所見の位置づけについても一定のコンセンサスは得られていない。そこで本号では、これらの問題点を踏まえて、治療効果判定や長期経過観察に適した内視鏡的重症度評価の確立に寄与することを目標に、「IBDの内視鏡的粘膜治癒—評価法と臨床的意義」をテーマとし、松本、味岡、蔵原の3名で企画を担当した。

まず、序説の松本論文ではIBD診療におけるtreat to targetの概念、粘膜治癒の定義と内視鏡的スコアリングの現状と問題点について概説された。

続いて、主題の味岡論文では重症度評価における病理組織学的所見の意義と位置づけが検討された。内視鏡的に活動性が高度なUC症例において、非難治例と難治例の生検組織の組織学的活動を比較検討した結果、生検による組織学的評価が内視鏡的重症度を判定するうえで重要な付加的情報となる可能性を指摘した。久松論文では、UCとCDの大規模臨床試験のレビューに基づいて、各試験における内視鏡的寛解の定義と位置づけ、粘膜治癒の達成と長期予後の改善との関係に関する知見がまとめられた総説となっている。本論文を熟読したうえで、以下の各論を読み進めたい。

UCの内視鏡的重症度評価に関して、武田論文では、近年、国内でも用いる専門施設が増加し、その成績を頻繁に目にするようになったUCEIS (ulcerative colitis endoscopic index of severity)と、従来汎用されてきたMES (Mayo endoscopic subscore)の両者を自験例において比較検討した結果、UCEISがMESよりも検者間ないし検者内一致率が高いことが示され、その妥当性が示唆されている。井尻論文では、画像強調内視鏡(AFI (autofluorescence imaging)、拡大内視鏡)所見からみた重症度評価が自験例において検証され、AFI観察のほうが組織学的な炎症強度の正診率および内視鏡診断の一致率で白色光観察よりも優れていたことが示された。さらに拡大内視鏡分類が組織学的活動性とよく相関し、再燃の予測にも有用であったとしている。渡辺論文

では、NBI (narrow band imaging) 拡大内視鏡観察による活動性把握の可能性について既報のレビューを交えて言及された。その中で、拡大観察した部位における組織学的活動性との相関に関する報告がみられるが、拡大観察した部位が大腸全体の疾患活動性をどの程度担保するのかが課題と指摘している。中里論文では、最大450倍まで拡大することが可能となった超拡大内視鏡(endocytoscopy system ; ECS)による活動性評価の有用性が検討された。ECS所見と組織学的活動性が相関することが示され、再燃リスクを評価できる可能性も示唆されている。

CDの内視鏡的重症度評価に関して、冬野論文では、抗TNF α 抗体製剤により寛解導入された大腸型、小腸・大腸型CD患者において、二次無効予測に対するSES-CD (simple endoscopic score for CD)の有用性を遡及的に評価した結果、SES-CD値(>10)が予測因子の一つとして抽出され、二次無効予測に有用となる可能性が示唆されている。竹中論文では、小腸病変の評価に関して、SES-CDを小腸にも拡大したスコアリング法を用いてバルーン小腸内視鏡所見を評価することが提案され、MR enterographyによる評価法が紹介された。大森論文ではカプセル内視鏡による小腸病変の評価の現状について既報がレビューされ、その限界と新規スコアリングシステムの必要性を論述された。小腸病変のスコアリングに関するさらなる検討が望まれる。

主題研究の大宮論文では、小腸炎症性疾患に対するプローブ型共焦点レーザー内視鏡(probe based confocal laser endomicroscopy ; pCLE)の有用性が検証された。通常光観察では一見正常に見える粘膜の場合でも、pCLEでは軽微な炎症所見を捉えることが可能であることなどが示され、再燃リスクの検討や病態解明に有用となる可能性が示唆されている。

以上のように、本号では、IBD診療における内視鏡的重症度評価に関する最新の知見が収載された。粘膜治癒の達成と長期予後の改善が相関するというエビデンスが蓄積されつつあるが、一方で、日常臨床を念頭に置くと、より簡便で妥当性のある内視鏡スコアの確立など課題が山積していることを実感する一冊となった。本号がその解決の糸口となることを期待したい。